

酒井正子著

『沖縄・奄美 哭きうたの民族誌』

末次 智

1

あくまで個人的な考え方だが、その出身者ではなく、琉球弧をフィールドとする研究者のなかには、フィールドワークという語に私たちが抱く一般的なイメージを超えて、対象にさらに深く迫る仕事をしている人が何人か居る。本書の著者酒井正子氏も、私がそのように思う一人である。酒井氏の主なフィールドは奄美諸島を中心とする琉球弧であるが、その調査は、一九八三年以来数十回におよぶといい、なかでも徳之島については、数度にわたり集落に住み込んでいるという。もちろん、酒井氏の調査の深さは、その回数の多さのみに拠るのではない。その過程で、対象の背後に存在する共同体を、外からだけ観察するではなく、その中に入り込み、内部にひそむ意味と共に

有しようとする態度によるものと思われる。文化人類学を専攻しながらも、大学在学中にうちこんだ合唱を通して、時に忘我的な状態に導くシャマニスティックな「歌の力」に興味を持ち、琉球弧の歌々の調査に入ったという酒井氏にとり、歌は自らの外にある対象ではないのである。

フィールドワークをほとんど行わない不遜な私などにとって、酒井氏のような方々の仕事は、琉球弧（の歌）について考えるさいの、まさに導きの糸としてある。そのような酒井氏からは、すでに、大著『奄美歌掛けのディアローグ』（一九九六、第一書房）が、私達の手元に届けられている。これが刊行されたさい、すぐに読みふけた覚えがある。前著のサブタイトルにある「あそび・ウワサ・死」というテーマ、とくに後の二つは、表面的な調査ではなかなか現れにくいものである。これは、その「序章」

に記された次のような方法により見いだされたと考えられる。

調査にあたっては、機会を設定するよりも、実際の場面（行事や祝いなど）に出会い、参与観察を行うことを重視した。インタビューでは、誘導的な質問は避け、相手は何を話したいか、何を重要と思っているかを感じるよう心がけた。また三〇代以上の人達はシマゲチで濃密な意志の疎通をしているため、その習得と理解につとめた。（一五頁）

こちら側の視点に合わせて対象を切り取るのではなく、相手の価値に寄り添うことを行っている。このような調査の積み重ねの果てに姿を現してきたのが、日常に紛れ込み、なかなか見えにくいやつサ歌であり、そして、強いタブーに覆われて表に出ることが少ない死に関わる歌の数々であった。

2

前置きが長くなつた。しかし、本書がテーマとする、死に関わる歌々は、一通りの調査では見えてこないことを確認しておきたかったのである。酒井氏は、「死に関わる歌」に

ついて、本書では次のように書いている。

それは、いつでも、どこでもうたえるものではない。遺体を前にした突發的一回的な行為であり、近親者以外は耳にする機会がほとんどない。さらには死のケガレと直結したタブー性ゆえに、記録はきわめてむずかしい。思いを託されるようになつたまま聞かせてもらつたのがつまづもつて、いつしかある全体像を結ぶようになつた、というのが正直なところである。(一〇〇頁)

「思いを託される」ような関係を築くことによってはじめて記録が可能であった歌々が、本書に記されていることは、読む上で心しておきたい。

また、本書は、それまでの仕事の集大成としての前著と異なり、最初から死に関わる歌々をテーマに企画され、一般の読者にもわかりやすく説いたものであるから、目次の構成は本書の全体を端的に示しており、これをまず示しておくことにする。

第一章 歌の小宇宙＝シマ
第二章 德之島の〈供養歌〉と〈哀惜歌〉
第三章 沖永良部島のクオイ

第四章 沖縄諸島の葬送歌

第五章 与那国島のカデイナティ

第六章 琉球弧の死生觀

終 章 韓國の哭きうた

死に闘わる歌々は、前著の「Ⅲ 死」の中

でも詳細に取り上げられているが、本書はこれを踏まえながら、新たな歌をも対象に、琉球弧に点在する歌々から、死と歌の関わりを明らかにしようとする。

序章では、与那国島のガデイナティという〈供養歌〉、そして、徳之島の同類歌との印象的な出会いから書き起こされている。まず、ここで、「哭きうた」について、著者の定義を確認しておこう。

葬送歌＝哭きうた（総称）——死の直後から四十九日頃まで、死者の葬送に直接関わって無伴奏でうたわれるジャンル。大きく以下二種類に分けられる。

供養歌——葬式における儀礼的な弔い泣き。

哀惜歌——死後四十九日まで、個人的にうたわれる哀惜の歌。

このような前提で、記紀や万葉の「挽歌」、また喪主の哭泣を記す『魏志倭人伝』、あるいは奄岐島や伊豆大島の民俗に見られる哭き

うたに触れつつ、著者が琉球弧において以下の章で明らかにしようとする哭きうたの「ミッシングリング」が、日本列島とくに「黒潮流に沿つた島々」につながる可能性があることをまず示唆している。

また、前著があくまで研究書として、客観的な叙述に重きがおかれていたのにに対し、本書は「広く現代社会の問題として」（あとがき）哭きうたを取り上げており、その点で一步踏み込んだ氏の判断が示されている。

そういう意味で、「人はなぜ泣かなくなつたか」（一三頁）といふ氏の関心は、民俗研究から同時代の問題に切り込んでいった柳田国男（『涕泣史談』）の視線とも重なることとなる。

3

第一章では、琉球弧の歌の背景をなす共同体について述べられる。とくに徳之島を対象に、人々のつながりの強さが明らかにされ、こういった人々の集まり、つまり「その運命共同体の最小単位が、『島』をさらには細分化したシマ（集落）である」（二五頁）とされる。シマジマの関係は「集落ごとに

枝分かれした微妙な文化的差異」（二九頁）を保つてゐるといふ。徳之島は、酒井氏がもつとも力を注いで、調査を重ねてきた地域であるが、ここではとくに目手久といふ集落が取り上げられ、シマの興味深い様相が一般的の読者に伝わるように具体的に描かれてゐる。とくに、各シマのうちに、そしてシマとシマの間にはりめぐらされた「歌あそびのネットワーク」は注目される。たとえば、他シマとの歌掛けで命を取られるいようにと、あるいは、夜道でムン（悪靈）に会つたときに身を守るためにうたうといふ『シマ朝花』ブシにのせた「フカソーネの歌」の「靈力」は、歌について考えようとする私のような者に、大きな示唆を与えてくれる。哭きうたというある意味で究きのなかで生き、そして伝えられてきたのである。

第二章では、前章で取り上げられた徳之島の、哭きうたが取り上げられる。これは、前述の『供養歌』である。「供養歌」は、葬儀での遺体を前にした直接の声かけであり、不^イに分かれる」（四九頁）まず、音声記録

が一例しか知られていない「泣きクヤ」は、「決まつたフシやことばではなく、各人なりのことばやリズム、フシで表現する。感情のことは、やさしく、その思いも激しい」（八一頁）とされる。そのため、洞穴葬で、死後おもむくまま、ふだんしゃべることばで、あらゆることばを自由にフシをつけてうたつた」（同前）これに対し、「クヤ（ウモイ）」は、「個人的・即興的な『泣きクヤ』にくらべ、より組織だったものである。集落の長老の女性たちが一つの短いフシに声を合わせ（齊唱）、死者への呼びかけを繰り返しうたう」（五一頁）このようないくやをしないと「あの世へ渡つていけない」などと言われ、「島びうのシマ朝花」ブシにのせた「フカソーネの歌」であった」（五四頁）とする。次に「哀惜歌」であるが、これは「死後四十九日頃まで、残された家族や近親の男女が、寂しさをまぎらすために口ずさむ個人的な歌である」（六〇頁）《うじよぐい節》《はんしゃれ節》《やまが節》《二上がり節》といった歌がこれに当たるが、これらは永池健二氏が、靈との対話であると「独り歌」なのではないかという。また、重要なのは、「短詩型歌謡の萌芽状態」がそこに見られることだといふ。

第三章では、まず、奄美の南二島（沖永良部、与論）での洞穴葬のあり方が取り上げられる。この二つの島では「死者との距離がたいそう近く、その思いも激しい」（八一頁）とされる。そのため、洞穴葬で、死後四十九日の間歌を通して目の前の「死者との絶えざる対話」が交わされることとなる。沖永良部島の「不定型な哭きうた」であるクオイは、そのような洞穴墓で死者（屍体）との間に交わされたものである。ここでも、島の歌者も指摘する、シマウタである『いきんとお節』とクオイの関係が指摘され、前章と同様に歌の歴史が示唆される。また、ハミウルシ（靈寄せ）、ショージ（靈が降りた人の泉州での儀式）、フズヌ祝（正月の先祖供養）といった儀礼をユタが執り行うが、とくにフズヌ祝では、依頼者も積極的に関わるユタとの「相互作用」を、両者が日常的に交流しているシマ社会を前提とするところである。

第四章では、フランス人宣教師の記録に、沖縄諸島の「泣き女」や「泣き男」の記録をも見据えていて、酒井氏は歌の歴史をも見据えている。

見いだし、これを前述の哭きうたの関わる葬送儀礼に通じることを指摘している。あるいは、伊波普猷や山内盛彬の記録に国王の『供養歌』を、久高島のノロに葬送歌があることと指摘し、一方で庶民のための『供養歌』であるムヌイーナチ（物言い泣き）は、徳之島のクヤと同類であることが指摘されている。さらに、例外的な勝連町の『葬式のウムイ』は、ノロが管轄したものであつた可能性が高いともいう。そして、これも伊波や山内の記録に残る「別れあしひ」とそこでうたわれる歌は、『哀惜歌』として捉えることができる。だがこれは、沖縄本島の場合、「風俗改良運動」の中で、「女性をターゲットとしたジエンダー的な抑圧」（一四〇頁）を受けてとも指摘し、後にも触れる、酒井氏の現代的な問題意識の一端をここに伺うことができる。

第五章では、与那国島が取り上げられる。

ここでは、まず『日本民謡大観』八重山諸島篇（一九八九、日本放送出版協会）に記録された「通夜の歌」である『みらぬ歌』について、当初の調査では、「与那国島民謡工工四」（一九七〇、与那国島民謡芸能保存会）に記された歌詞しか聞くことができない。

くなっているといい、そこで文字記録の功罪についても言及している。だが、この章の圧巻は、本書冒頭にも取り上げられた、二〇〇〇年七月の葬儀の模様についての記録である。なかでも「泣き・ことば・うた」が一体となつたという納棺前の近親者との「わかれの盃」についての記述はたいへん印象的である。そこでは、死者へのクイガギ（声掛け）、そして、『供養歌』として印象的なカディナテイ（風泣き）が、さらに右の『みらぬ歌』や、八重山の代表的な民謡である『すんかに』や『とうばるま』が、それぞれ「わかれ歌」として次々に歌われる。このなかで、死者の身近な人がその人生の岐路でうたつた「意味深い」歌が、死者へ別れの歌の一つとして歌われる。酒井氏は、ここに、「人はなぜ死者に向かって声をあげて泣き、うたうのか」という問い合わせがあると述べている。それは、「声に出してうたわれてはじめて『情けをかける』ことになる」からだという。これは、次章でも強調されているが、その説明がすこし舌足らずに感じられる。これは本書の主要なテーマであるから、さらなる説明があつてもよかつた

歌》から《すんかに》への流れを通して「シマウタの生成」を推測している。

う気持ちになる」と言うのを示唆的だとし、「理想的な喪の行為の一端」を示していると
いう（二二〇頁）。酒井氏は、琉球弧を通して、現代の日本における葬送のあり方を考え
ようとしている。

5

終章では、韓国の哭きうたが取り上げられる。まず、映画『祝祭』に描かれる葬送儀礼について触れ、与那国などの例と比較される。さらに、氏が実際に見聞した死靈を洗い、淨化する韓国珍島のシックムツクツについて報告され、これらと琉球弧の例が、前章のまとめて沿つて比較される。とともに共通する要素を含みながらも、「総じて韓国はパフォーマンス・舞台へ、琉球弧はことばかけからウタへの生成へ向かう傾向があるようと思われる」（二四一頁）と述べている。ある意味で、前章まで、本書のテーマは完結しているようと思われるが、この章が最後に付されているのは、「あとがき」でメラネシアの例にも触れているように、琉球弧に確認できた哭きうたの文化が、黒潮流海流にのりアジアへ、さらに地球上の

他地域へも広がる可能性を示し、これが人類文化の基層をなしていることを示唆しようとするとものだらう。死は、人類全体にとり、そして個々にとり避けることのできない課題であり、これと、やはり普遍的な文化だと思われるウタの交差点に現れる「哭きうたの文化」は、さらなる広がりを持つのであろう。

氏は、与那国島での葬儀に付き添いながら、次のように述べる。

こうして幕に囲まれ、空を見上げながらシマの中を歩んでゆくのは、どこでもない

い。

（小学館、二〇〇五年発行、本体一九〇〇円）
(すえづぐ・さとし／京都精華大学)

見（安堵感）すら与えるものなのだろうか。
(二六二頁)

人は、かならず死ぬ。だが、現在の我々に死の、そして葬送のイメージはリアルだろうか。以前勤務していた職場の学生に、「私のレクリエム」と題して自らの葬儀に流す歌についての文章を提出してもらつたことがある。そこに記された多くの歌は、現代のボビュラーミュージックだったが、なかには、幼少時の大切な記憶につながる童謡

を取り上げた学生も居た。本書が取り上げる哭きうたは、長い時間の文化発酵のなかで醸し出されたレクリエムであるにちがいはない。琉球弧の「哭きうた」は、私（たち）の人生の最後に、大切なイメージを与えてくれるよう思う。